意見書

2021年2月25日

裁　判　官　殿

住所

氏名　　三井所　清典

私は町田市立芹ヶ谷公園の特質と町田市立国際版画美術館の特質を棄損する町田市国際工芸美術館の基本設計に関する意見を述べ、実施設計への移行の中止と基本設計の見直しを要望する。

記

1経歴及び職歴

1963年	東京大学工学部建築学科卒業
1968年	同大学院博士課程修了
1968年－2006年	芝浦工業大学専任講師、助教授、教授
1970年－現在	株式会社アルセッド建築研究所設立主宰
2006年－現在	芝浦工業大学名誉教授
2007年－2013年	一般社団法人東京建士会会長
2012年－2020年	公益社団法人日本建築士会連合会会長
2020年－現在	公益社団法人日本建築士会連合会名誉会長

2意見

（1）　町田市芹ヶ谷公園の特質

町田市芹ヶ谷公園は、谷地と斜面で構成される多摩丘陵の自然が豊かな里山の趣きの残る公園である。斜面にはコナラなどのどんぐりの実る樹木や紅葉するヤマモミジなどの落葉樹も多く、谷には湧水もある。かつてはわさび田や芦田、谷地水田があったという話も納得する風情の公園である。今日ではこういう多くの里山は開発されて市街地となり少なくなっているが、芹ヶ谷公園は市街地に近接して残された貴重な里山をしのばせる意義深い公園である。

（2）　町田市立国際版画美術館の特質

町田市立国際版画美術館は、そういう里山公園の谷地の一隅に佇むように建てられた建築で、前の広場と背後の斜面の林を来館者と公園利用者が楽しめるよう自然と一体となった美術館として巧みに設計されている。

その国際版画美術館は第 27 回 BELCA 賞をロングライフ部門で受賞している。BELCA 賞は良好な建築が社会資産として現代の社会の中でいきいきと活用されることを目的に、多くの良質の建築が簡単に壊されたバブルの絶頂期に設けられた賞で、長年に亘り適切に維持され、今後も長期保全計画がある模範的な建築物をロングライフ部門の賞としている。

国際版画美術館は町田市が世界的にも珍しく、わが国では初めての公立の版画美術館として企画・計画され、少ない学芸員でも運営できるようコンパクトな美術館として実現している。建物は躯体のコンクリートが長持ちし、省エネルギーとしても効果の高い外断熱で、レンガ仕上の外壁とするなど、メンテナンスも少なくて済み、長寿命建築となるよう設計され、建設されている。版画美術館の玄関、玄関ホール、ロビー、階段、2 階の展示室前のホールと続く空間と、1 階の講堂前の外の池や紅葉の林が見える大きな窓のあるホールは展示室や講堂に向かう準備的道行きの空間で、鑑賞する期待や雰囲気を高めるところである。帰りは余韻を楽しむ空間として来館者にとって大切な空間である。またこの連続する空間は、美術館側からは、穏やかに来館者を管理する空間でもある。

こういう版画美術館が多くの市民や版画ファンに愛され、いきいきと使われている幸せな建築として高く評価されたのである。

（3）　美術館の安全性確保の重要性

美術館の設計で、一般にはあまり知られていないことだが、極めて重要とされるのは、展示品や収蔵品の安全性の確保である。特に再制作できない貴重な美術品の安全性確保は、現代の人々に鑑賞してもらうと同時に、それ等を未来に確実に受け渡していくことが美術館の責務であることから求められる要件である。

美術館の安全性確保とは、来館者や侵入者による美術品の棄損や盗難の他、湿度や温度の変化、有毒ガス、土壌等に付着する菌類、紫外線を含む太陽光等によるゆっくと進行する汚損や老化・劣化から美術品を守ることが含まれる。

特にここでの主要な扱いの版画は、紙に刷り込まれたもので、美術品の中でも太陽光や空気の質の変化に脆弱なものである。そういう安全性確保のために美術品の搬出入や移動・収蔵や展示に配慮された設計が求められると同時に、来館者の管理、イベントの管理など美術館の運営管理にも厳しい管理が求められる。さらに学芸員が良質の企画展を計画する際に所蔵する収蔵品だけでなく、他美術館やコレクターからふさわしい美術品を借用することがよくある。安全性の低い美術館には貸出しを断られることもあり、万一に備える保険料が高くなることもある。学芸員が満足する企画展が実現し、鑑賞者がいい美術品を鑑賞できる点からも美術館の安全性確保は極めて重要な要件である。

（4）　町田市立国際工芸美術館が調和を図るべき芹ヶ谷公園と版画美術館

町田市立国際工芸美術館とそれに付帯する施設の基本設計が公開されているが、既存の

社会的資産あるいは資源といえる良質の町田市芹ヶ谷公園及び町田市立国際版画美術館に係わる部分で、後続する施設が先行する既存の施設に対する配慮が不足していると感じるところがある。芹ヶ谷公園施設関係者、公園利用者、一般市民等、また国際版画美術館施設関係者、美術館利用者、一般市民等に広く公開し、改めて要望を聴きとり、再検討を望む観点から、以下の３つの問題を指摘したい。

① 版画美術館の通り抜け公園通路の美術館の安全性と美術鑑賞に及ぼす影響

まず、版画美術館を通り抜け、池の部分に設置予定されているエレベーターを介して　上の国際工芸美術館を通り上の町につながる自由通路の計画について。この動線は下の町の人々が上の町の市街地へ往き来する生活利便通路として公開する設定であるが、美術品の安全確保の視点からは致命的、破壊的な提案である。

玄関からホール、ロッカー、ロビー、階段等と連続する美術館専用の空間で来館者や物品の持ち込みなどを管理するように意図されているところを、いわば駅のコンコースのように誰でも自由に買い物などの用具や商品を持って通り抜けられる変更により安全管理は至難となる。先行の企画や実現に向けた努力の数々をあまりに簡単に壊してしまう行為であり版画美術館の質を保つために再考してほしい。2階の展示室直前のホールも2階からのエレベーターの利用が誰にでも公開される自由通路となれば展示品の安全性は確保し難く、展示品は限定されることになり、美術館の質が落ちることにつながる。また光や空気の変化による美術品の劣化対策として展示室には窓がない。それだけに 1 階講堂前の大きなガラス窓は、来館者にとって意味のある窓である。池や滝（現在はとまっているがいつでも回復できる）を通して四季を感じる紅葉の林を眺め、休息するやすらぎの窓である。その窓を塞ぐようにエレベーター施設を設けることは安全性同様に先人の実現した想いを踏みにじるような行為である。版画美術館側からみれば一方的に犠牲を強いられる手の加え方と言わざるを得ない。

② 版画美術館の工房取り壊しの建築的・経済的損失

版画美術館には教育普及という大きな使命がある。版画美術館には版画を鑑賞する展示の他、版画を制作する技術の研修や体験するレベルの高い工房がある。工房を利用する版画ファンが育ち版画美術の裾野を広げることに貢献している。工房の建築は他の部分と同じく長寿命対策が構じられ、版画制作のため据えられている機械設備の質も高く、芸術大学レベルといわれる。工芸美術館の基本設計では、この工房を壊してアートセンターを担うアートステージを設けるとしている。版画工房は新たに新設する施設に再生することでよしとする方針であるが、経済的に大きな負担となることや、版画美術館と一体にあることの利点など版画美術館や工房利用者の意見をどの程度聴取したか、届けられた不満の声からは疑問がある。建築共々既存施設を活かす検討がどの程度行われたか、現基本設計との比較検討の内容を明らかにしてほしい。

③ 芹ヶ谷公園の斜面地での工事の公園の特質に及ぼす影響

芹が谷公園の斜面に関する問題である。新しい工芸美術館の本体施設をどこに配置する

かは版画美術館の配置場所選定の時に比べ、一層難しい課題であろう。この課題解決のためにも芹ヶ谷公園運営管理者や公園利用者の意見は十分尊重すべきであり、既存の版画美術館の管理者や美術館利用者の声や公園を横切り園路を日常の生活路として利用している人々の声、さらには一般市民の意見も吸収して、公開性、透明性の高い立地選定を改めて検討してほしい。

基本設計に基づく工事を予想すれば　斜面を覆っている多くの樹木を切り倒し、斜面を大きく削り、大規模な開発的手段をとることになろう。自然を尊重しようというこの時代の建設工事としては適切なものではない。平場の活用を主として、斜面には極力手を付けない緑の里山保全の考えを尊重してほしい。上の住宅から公園へのアプローチ園路はいかにも里山公園の入口らしく整えられ斜面に緩やかに続く緑陰の道として近隣住民に親しまれているようである。一方公園の斜面の上空に架けられた基本設計に言う空中スロープは樹木を見下ろすメリットを強調されているが、スロープの裏面やスロープを支える柱の見え方は里山の魅力を欠くものである。さらにそれらが汚れたり劣化することを想像すればむしろない方が良いと思える。また安全な柱を斜面に建設するためには柱脚や基礎工事で斜面を傷める大きさや工事費の割高になることも憂慮される。空中スロープの利用について考えると快適に使える時期は想像できるが、日射の強い日や、雨の日、風の強い日は利用しずらいことも予想できる。林の中を自然を身近に感じながら地上のスロープを歩く方がより快適な日々が多いと予想されるが、比較検討をより深め広めてほしい。芹ヶ谷公園のもつ魅力や価値の観点から仮設の工事用通路や工芸美術館完成後の搬入動線の計画も十分な検討がなされたとは思い難い。

（5）　国際工芸美術館の実施設計への移行の中止と基本設計の見直しの要望

私は　以上の考察により、後で計画される国際工芸美術館が、先にある里山の魅力をもつ芹ヶ谷公園と自然と一体化した建築と運営管理の評価の高い国際版画美術館を尊重する立場から、国際工芸美術館の現在の基本設計に基づく実施設計への移行中止を要望すると同時に基本設計の見直しを強く要望するものである。

そのためには広く利害関係者を集めて協議することが大事である。協議では現計画によるダメージを十分表明してもらうことが必要で、その上でダメージをなくす検討が必要になろう。公園と版画美術館のダメージがなくなる工芸美術館の案ができれば芹ヶ谷公園における町田市の宝は公園を含め、三つになる可能性が高い。なぜならそれは関係者の総意に基づく案だからである。このように工芸美術館、版画美術館、公園の三者の立場の人々が真剣に工芸美術館を考えることになることは、後続の事業を実現する理想的な方法である。

三者の立場から主張される条件がどうしても食い違う場合は著作権に係わる係争で用いられるような比較衡量という検討方法も合意形成の上で必要になるかもしれない。芹が谷公園の中での建築設計では、そうならないアイディアが必ず出て来ると思われる。

以上